

## [概要]

近年国内では農業従事者の高齢化や後継者不足といった農業の担い手に関する問題や、相次ぐ大規模自然災害による農産物への打撃、そして国産品に対する需要増加など、食料への関心が高まっている。そうした中、持続的な食料生産供給体制を確立する手段として注目を集めているのが植物工場である。本研究では富山市えごま6次産業化に伴う植物工場運営を事例に、先行研究を参考に植物工場での生産供給体制を明らかにした。それを受けて「外来型開発」と「内発的発展」的な視点に基づいて本事業を検討し、えごま生産の富山市での位置づけについて、地元の資本や農業者との関係性や位置づけを分析した。その結果、富山市の財政状況に依存した「外来型開発」的側面が見られた一方で、工場で採れたえごまを用いて、6次産業化推進グループに所属する人々による新商品開発や、食育の一環として学校給食という形で市内の児童・生徒へ提供されるなど、「内発的発展」的側面も見られた。先行研究では、植物工場は地域的な連関が生じにくいため、地域内の資源を活用する内発的発展よりも、域外資本や補助金に依存する外来型開発の形を取らざるを得ない状況を問題視していた。しかし、本研究の事例では官民一体となって地域内の資源を活用して事業を発展させていこうとする取り組みが見られ、こうした手法こそが地域において持続的に植物工場を運営するうえで重要であると考えられる。

キーワード：植物工場，6次産業化，外来型開発，内発的発展